

「子育て」雑考

— 新聞投稿欄に見る

「子育て」と「育児」—

小林 美恵子

生まれたばかりの赤ん坊を抱えて育児に追われる毎日である。なかなかまとまったものを読む時間もない。手にとるのはせいぜい雑誌、新聞の類……そんな中で、作家・津島佑子氏が「子育て」という語について書いているのが目にとまった。(朝日ジャーナル・女の戦後史 ⑥「OL、子育て、キャリア・ウーマン」1984 6.1)

津島氏は7～8年前 子どもを育てることが「子育て」という語で表現されるようになった時、そのように言い換えた女の気持 — 出産、育児を女自身の主体的に選んだ行為であるという主張をこめる — には共感しながら、言葉そのものには強い反発を感じたという。その理由として この語に人の親が子の生命、運命までも左右するような、親が神になりすましてしまったような意識が潜んでいるためではないか……としている。また「子育て」にかぎらず女に関係の深い言葉は短いサイクルでの言い換えが行われてきたことにふれ、「たとえば『育児』を『子育て』に変えてみたところで、女が子どもを育てるものだ、という意識まではいじることができず、そうして本来そこまで手が届かなければ、言い換えの意味も成さないわけで、実際『子育て』という言葉も現在は、今までの『育児』とほとんど変わらないニュアンスで使われるようになっていて、いずれまた 新しい言葉を女たちは求めだすことになる。」とも述べている。

作家の「子育て」(という語)観にはなるほどと思われる。新聞などでは「子育て」という語はあちらこちらに見出され、まさに全盛という感じだが、身近には 自分はこの語を使わないという人が意外にある。

「『子育てが終ったら……』というような言い方はしない。やっぱり『子どもの手をはなれたら』とか『手がかからなくなったら』と言いたい……」(40代・女性)「『子育て』という語は女性解放運動の中で出てきた新しいことばでしょう。自分は使うことは少ない。」(40代・男性)「昔からある語ではないが

見聞きすることに抵抗は感じない。ただ自分では使わないと思う。でも『子育て』のかわりに『育児』を使うということではない。2つの語の意味は少し違うのではないか。」(50代・女性、実は私の母)

ついでに「子育て」と「育児」についても何人かにインタビューしてみると——
「『子育て』というとかむずかしくて高級なことという感じがする。ちゃんと理論がなくてはならないような……。『育児』はミルクを飲ませたり オムツを替えたりという身近な感じ。『育児』は『子育て』の一部かな。上の子についてはもう『育児』はあてはまらないみたい。」(35才、9才と0才の子を持つ女性)

「『育児』という『子育て』の中でも特に生物学的な領域、食事、排泄、睡眠とか——そういう部分にかかわるもの。」(30代、男性)

「『子育て』の方が『育児』よりもやさしくてやわらかい感じがするから好き。自分でも何も考えずに使ってきた。『育児』というと機械的で固い。精神的なのより、ただ空腹をみたしてやったり、身のまわりの始末をしてやったりという感じがする。」(40代、女性。同席の30代、60代からも賛意の表明がある。月に1度集って婦人問題を語るグループのメンバーたち)

というわけで「子育て」という語に対する感じ方は人さまざまである。また国語辞典ではともに「子を育てること」(三省堂国語辞典)と語釈されている「子育て」と「育児」だがここにあげたいくつかの意見に見るかぎり「子育て」は単に「育児」の同義語、或いは言い換え語としてあるのではなく、2つの語の間には意味の使いわけがあるようだ。確かに「BG」が「OL」に、「女中」が「お手伝いさん」に言い換えられたとき、「BG」や「女中」が使われなくなっていたことと、「子育て」という語が生まれた「7～8年前」(津島氏)以後もこの語とともに「育児」も使われ続けている状況との間には明らかに差があるわけで、これからみても「子育て」は「育児」の言い換え語であると単純には言えないと思う。

実際には「子育て」「育児」はどのような人々にどのような使われ方をしているのだろうか。朝日新聞の1984年1～8月の投稿欄(「声」「ひととき」)に現れた両語について、その使用者の性別、年齢を整理してみたのが次表である。

(表1)

	子 育 て		育 児	
	女	男	女	男
20代	3		5	
30 "	10 (12)	2	7 (10)	1
40 "	8		3 (5)	1
50 "	3			1
60 "	0	1		
計	24 (26)	3	15 (20)	3
	27 (29)		18 (23)	

〈注〉 () 内は1人で複数回使用しているものを含めたのべ語数である。

従来 子どもを育てるのは女性の仕事とされてきたこと、「ひととき」が家庭欄の投稿欄であって書き手がほとんど女性であることなどから、表に見るようにこれらの語の使用者は圧倒的に女性に片寄っている。また全体の用例数も多いとはいえず 以下述べることはあくまでもこの投稿欄という限られた範囲にいえることなのであるけれども — まず「子育て」と「育児」に関しては8対5の割合で「子育て」の方が優勢である。なお「育児」に関していえば「育児休暇」「育児法」「育児参加」(各1例)「育児ノイローゼ」(2例)のように「育児 — 」という1つの定着した形で使われているものがあり、これらについては書き手の側に「子育て」を選ぶか「育児」にするかという選択の余地はない。そう考えると「子育て」の数の上での優位性にさらに増すことになる。但し男性では両語は同数で現れているし、20代の女性ではむしろ「育児」の方が多く使われている。インタビューでは「子育て」を使わないと答えたのは40代、50代の人々であったが、この投稿欄においては40代、50代は「子育て」をもっとさかんに使っているという正反対の結果が出ている。

さて、それでは「子育て」と「育児」との間に何らかの意味的な使いわけは存在するのだろうか。これらの語の使われ方の特徴を述べながら考えてみよう。

まず「育児」で目立つのは「家事」という語と並べての使用である。（例の下線は私自身による。）

例 1. 妻自身が心安らかでなければ家事も育児も遂行できない。（35 才、女、主婦、ひととき）

例 2. 確かに子持ちの女は家事育児に責任があるため欠勤したり残業できなかったりする。（28 才、女、教員 声）

のようなもので、「家事と同様に育児も」「仕事と家事と育児」「育児や家事や病人の世話」と並べたものも含め 7 例見られる。30 代 4、40 代 1、20 代 2 でいずれも女性である。また、

例 3. あなたは所帯を持って以来（中略）炊事、洗濯、育児等家事を一生懸命してきてくれました。（51 才、男、会社員 声）

例 4. 家庭科といえば調理、洗濯、被服、育児など女性中心の家事を連想させるため — （27 才、女、公務員 声）

のようなものもある。この 2 例は子どもを育てることを料理や洗濯等と並べて、家事（「家庭内のいろいろな事柄、また家庭生活を営むための大小いろいろの仕事」（『広辞苑』）の 1 つと見ているわけで、例 1、2. のように「育児」を家事に含まず、家事と同等の比重をもって並べるとらえ方とは明らかに異なる。『三省堂国語辞典』でも「家事」は「料理、せんたく、子どものことなど家庭をいとなむために必要な仕事」となっており「育児」は「子どものこと」として家事に含まれる形である。ただ投稿では育児を家事に含む形で記述しているのは 20 代女性と 50 代男性による前述の 2 例だけで、30 ～ 40 代の女性は例外なく「育児」を家事のうちに含めていないのがおもしろい。私自身、現在乳児と幼児を育てている 30 代なので、子どもを育てつつある 30 代や、ようやく育て終えた 40 代の女性にとって、育児は家事に含まれる一分野にすぎない、とはとてもいえない、その重さが実感としてよくわかる。

「子育て」の方はどのようなものと並べられているだろうか。5 例あるうちには

例 5. 女性の自立や職業や子育てなどの問題が叫ばれて久しい。（25 才、女、主婦 ひととき）

例 6. 子育てもし、保育園に通いながらの状況を抱え、仕事が続けられるかど

うか。(37才、女、教育労働者 声)

のように職業を持つことと対置させているものが2例

例7. 就職、結婚、子育て、「さてこれから」と思い少しでも条件のよい職場を、と思うと……(34才、女、パート ひととき)

のように時の流れの一部としてとらえているものもあるし、

例8. お金さえあれば事足る衣食住とは本質を異にする「家庭生活」、子育てのこと、最近よく耳にする育児ノイローゼ、子殺し、家庭内暴力……
(37才、女、主婦 ひととき)

のように多種のものと並べた例もある。ただ、やはり目立つのは「子育て」と「職業」とが並べられたもので

例9. 出産のために退社したのですが子育てが終わったらまた仕事を持ちたいと念じていました。(35才、女、団体職員 ひととき)

例10. 子育てにじっと専念し、やっと私も社会へ一歩踏み出せるせとぎわというのに……(33才、女、主婦 声/子どもの保育所への入所決定が遅すぎるという主張)

のようなものをも含めると、何らかの形で子育てと職業を持つことを対置させているものは8例にのぼる。「育児」の方にも職業と並べられたものは2例あるが、いずれも「家事、育児」と「職業」の対置であり、「育児」だけで「職業」と対置させているものはない。この点が「子育て」と異なるところである。

ところで例7. 9. のように「時」「時期」「途中」「終わったら」「さてこれから」等の語によって「子育て」をある期間としてとらえているものも多く、30～50代の女性で8例、30代の男性に1例、合計9例を見ることができる。この場合、期間のとらえ方は大きく2つに分けられるように思う。まず一方は、

例11. 確かに子育ての時の親の責任は重大で、弱者である子供の立場からも親の責任を問われて当然のことと思います。(31才、男、会社員 声)

例12. 子育ての途中から気づいて栄養のことなど話し、手伝いをさせてきたが……(48才、女、主婦 ひととき)

のように、単に親として子を育てること、その期間として「子育て」をとらえたものである。もう一方は、親としてというよりは自分(女)の人生におけるある

期間として「子育て」をとらえているもので、これが9例中6例と目立つ。次にその例をあげる。

例13. 人間、忙しい忙しいと子育てに奮闘している時が花なのかもしれない。

(39才、女、主婦 ひととき)

例14. 美術館に足を運ぶ女性の数が子育て時期の20代後半から30代前半に
極端におちこむことから思いたった。(44才、女、主婦 声)

なお、「育児」をある期間としてとらえているのは次の2例のみである。

例15. 私の育児時代はスキンシップなどという用語はあまり知られていなかったけれど、思い出すと終日スキンシップのようなものだった。(49才、女、主婦 声)

例16. 私も育児から手が離れた時 後輩たちが大変な目にあっているのを見たら何らかの形で手助けしたいと思います。(26才、女、主婦 声)

例15. は子どもを育てる方法そのものについて述べているし、例16. は育児から手が離れた時、他者の育児を手助けしたいという内容で、いずれにしても育てる親としての立場 — ひとりの人間としての立場というより — で使われているといつてよい。

以上から「育児」と「子育て」の意味、使われ方の違う部分が見えてきたように思う。「育児」は要するに文字通り「子を育てること」である。料理や洗濯と並び 人間が生きている以上避け得ない家事の一領域であるといつてもよいし、あるいはそれよりももう少し比重の重い家庭生活の一分野といつてもよい。

それに対して「子育て」は育てる人間(女)にとってのさまざまな生活分野のひとつ — 職業、結婚、趣味等と並ぶものとしてとられている。職業との対置、人生の過程での位置づけがそれを示している。どのような職業を持ち、結婚をし、趣味を持つかと同様に、どのような子育てをするか、あるいはしないかは育てる人間の選択の問題である。「子育て」はそういう意味を内包することばである。

例17. それでも子育てを通じて実に様々のことが経験できるし、無形の財産も残すことができると親バカに甘んじている。(41才、女、主婦 声)

例18. 私も5人の子の母となり子育てを通して父とのふれ合いを思い出すとき、父が生涯に通用するすばらしい教科書を私に書き残してくれたことに気

づきました。(45才、女、塾指導者 声)

のような例は「子育て」の持つそういう性格をよく表していると思う。ここでは「子育て」は、親として育てる人間に対して、子の成長という結果以外の何ものを与えてくれるものとしてとらえられているのである。「育児」にはこのような例は見られない。もっとも例11.のようなものもあり、「子育て」の方は「育児」と同様の意味で使われることはある。その意味で「子育て」は「育児」を含みそれより広い範囲を示す語であるともいえる。インタビューへの返答にあった「育児は子育ての一部かな」という感じ方はあたっているわけだ。

こうしてみると津島氏が「子育て」に「親が神になりすましてしまったような意識」を感じとり、またインタビューに応じてくれた人々の多くが「育児」を「機械的、生物的」、と感じるのに対し、「子育て」を「精神的、むずかしい」ものとしてとらえているのも、「子育て」という語のこのような性格——単に無心に子どもにかかわるのではなく、親である以前にひとりの人間であるという自己認識があって、その眼で子どもに向かうというような——の所以であろうと考えられる。また、それ故にこの語に対する好悪も別れるのであろう。親としてというより人間としての女性の生き方に関心を持つ婦人問題研究グループのメンバーや、投稿によって自己表出をしようとする女性にこの語が多く使われるというのにもうなづける。また投稿欄では男性にこの語の使用率が比較的低かったが、これは自らの生き方と子どもを育てることを対比させたり、結びつけたりという機会が女性に比して少ないと思われる男性にとって、そのような意識でこの語を使う必要も少ないからだろうと考えられる。なお男性と同じく「子育て」よりは「育児」優勢の傾向を示している20代女性については後述する。

ところで「子育て」という語自体は実は江戸時代の『浮世風呂』などにも出てくるし、「子育て地藏」「子育て観音」などというものもあって、格別目新しい語とはいえない。『広辞苑』には「子育て」について「子を育てること、また子供を健全に育てること」とし、『浮世風呂』の例をひいている。「子育て地藏(観音)」の「子育て」は「子を健全に育てること」であろう。「浮世風呂」では1人しか子を持たぬ女が子たくさんの女に「私どもは免角に子育てがなくこまりますよ、ホンにお羨しい事だ」(2篇上)と

言っているのだが、これは生まれた子が無事に育たないと深刻に嘆いているのではなく、やはり単に「子を育てること」（＝生まれること）がないと解するべきだろう。いずれにしても、投稿欄に見られる「子育て」—産み、育てる女性の人生を中心として、そのサイドから子どもを育てることを見るという形は従来にない新しいものであるといえる。また、単に「育児」と同義を示す「子育て」も江戸時代以来連綿として使われ続けてきたというわけではなく、やはり新しい意味の「子育て」の使用に触発されて使われはじめたことは、インタビューに応じてくれた人々、津島氏の持っているこの語の印象からいっても明らかであろう。

なおインタビューの中で「育児」は幼い子、「子育て」はもう少し大きい子にもあてはまるという意見があった。投稿欄ではどうであろうか。具体的に子どもの年齢、年代別にどちらの語で示しているのかを次表にまとめた。

（表2）

子 の 年 令	子 育 て	育 児
乳児（0～2才）	2	1
幼児（3～5才）	1	1
小 学 生		1
中 学 生		
高 校 生	1	
成人（大学生～）	2	

これを見ると「子育て」は子の年齢にかかわらず使われているが、「育児」はやはり低年齢—せいぜい小学生までの子に関して使われている傾向が見え、インタビューの結果とも一致した。ちなみに『広辞苑』にも「育児」は「幼児を育てること」と語釈されている。なお、先に20代女性では「育児」が「子育て」を上回って使用されていることを述べたが、これは20代女性の中に、30～40代女性ほどには自らの問題として子を育てることが位置づいていないということではなく、例16.などからもわかるように、20代女性が当面しているのがまさに幼い子の「育児」であるということによると考えられる。

ところで核家族など家族形態の従来との変化、夫も妻もともに職業を持つ夫婦

の増加などは、子どもを育てることは女性の領域であるという概念をかえ、今や子を育てることへの夫の参加は強く求められているし、既に実践している父親も少くない。投稿もそれを反映し、賛否はともかく、父親の「子育て」あるいは「育児」に触れているものが7篇ほどあった。書き手は20代が1人、他は30～50代の全て女性であるが、おもしろいことに、ここでは全体の傾向とは逆に4対3で「育児」という語が優勢なのである。

例19. 現在のパパは育児参加も増えてうらやましい限りですが、若い母親の子殺しや育児ノイローゼが後を絶たないのはどうした事でしょうか。(49才女、主婦 ひととき)

例20. 育児や家事に男性を参加させるための時間短縮はどうなったのですか。
(27才、女、学生 声)

例21. 夫と妻は男女平等や男女混合が定着し、家事と同様に育児も手のすいている方がする、なんて安易に子を放任してしまうのではないだろうか。
(49才、女、主婦 声)

と、ここで求められたり、嘆かれたりしているのは「子育て」をする父ではなく「育児」をする父——「育児と家事」「家事と同様」というのだから家事をこなすように実際に体を動かして子の世話をしたり、躾(しつけ)をしたりという父親だということになるだろう。一方「子育て」の方は

例22. 夫たるもの給料は全部渡して小遣いすら要求せず、子育ては最後の責任だけひきうけて口出しはせず……(45才、女、主婦 声)

のように実際に手をくだして世話をするのでなく、「最後の責任」をのみ取る——という抽象的な言い方で父親の参加を論ずる、といったふうがある。

例23. 父親もしっかり自信のある態度で子育てすべきです。(38才、女、主婦 ひととき)

の「しっかり自信のある態度」というのも、そういう態度でおムツをかえようというのではないだろう。

例24. もちろん子育ては母親の大切な役目です。(26才、女、主婦 声)
という例もあって、これらの場合、「子育て」からイメージされる父母の姿は、育児にともなう細かい雑事(授乳、排泄、躾、学校の世話等)をこなしつつ、単

にそれを天職として無自覚にこなすというのではなく、精神的にもしっかりしたものを持って、自らの生活に育てることを位置づける母と、雑事には手を出さないものの自信ある態度で最後の責任を引受けて母をバックアップする父ということになり、意識の面ではともかく、行為の面では従来の日本の役割分業型の家庭と変わるところはない。

以上からわかるように、投稿に見られる「子育て」という語は、女性の生き方という視点から見れば、そのさまざまな生活の一部を示す語として、育児こそ女の天職というような発想をはねかえすものとして使われているが、同時に形はどうであれ「女がするもの」（少くとも「女が中心となってするもの」だ。）という性格づけもあいかわらず持っていて、その意味では津島氏の言うように「女が子どもを育てるものだ」という意識まではいじることができず、そうして本来そこまで手が届かなければ、言い換えの意味も成さない。」という、まさにその通りの状態にあるといえる。

なお今回調査したのは朝日新聞だけであるが — 実は、6～8月の3ヶ月分の読売新聞投稿欄（「気流」および「赤でんわ」）についてもカードを取ってみたのだが、この新聞には3例（「育児」2、「子育て」1）しかこれらの語が現れていない。朝日の場合1～8月の月平均が5.6例、6～8月には全部で19例を数えることができるので、差はずいぶん大きい。新聞としての編集方針の違い（例えば家庭欄の「ひととき」「赤でんわ」は前者が女性や家庭の周囲にある問題を取り上げて論ずる調子のもので多いのに対し、後者は身辺随想風のものが中心である印象を受けた。）読者層やその興味の違い等がこの差の原因として考えられるが、いずれにせよ、そんなわけで朝日中心の調査となってしまったのである。 — さて、その朝日新聞に関していえば、投稿欄以外の見出し、本文等には「育児」より「子育て」の方が圧倒的に目立つ。「働きながら、私の子育て」という連載記事があるのをはじめ、「子育て関係プレー、昼パパ仕事、ママ育児、夜ママ仕事、パパ育児」（8.30 家庭欄、大見出しは「子育て」、小見出しが「育児」である。）「海の向こうの女の戦後、子育ての決意、重労働も」（8.22）等々。また編集者がつけたと思われる投稿欄の見出しについても、例2.1のように文中で「育児」という語を使っているのに、見出しでは「ユニセックス化で将

来の子育て心配」となっているものもある。この新聞に「育児」より「子育て」を選ぶという語選択の傾向があることは確かだと思うが、それと読者の投稿欄での語選択に相関関係があるかどうかは、未だ明らかではない。これは調べて見るとおもしろいのではないかとと思っている。

最後に津島氏が「7～8年前からだったろうか」と書いておられる「子育て」の使いはじめの時期だが — もちろん「浮世風呂」の「子育て」でなく新しい方である — 今回は残念ながら初出を確認する余裕を持たなかった。が投稿欄に関していえば14年前1970年に次のような例を見出していることを報告しておく。

例25. お互い子育ては本当に大事業ですね。(31才、女、主婦 1970、8.
17 ひととき)

この時期(70年代初頭)には、他の見出しや投稿等には「子育て」よりも「育児」の方がまだまだずっと目立つ。また『三省堂国語辞典』の「子育て」の項では第2版(1974)に「うまれた子どもを無事そだてること」とある語釈が第3版(1982)には単に「子どもを育てること」と変っている。このことから見ても、「子育て」は70年頃に使われはじめ、70年代後半に新しい意味での一般化が行われたといってよいのではないだろうか。そしてこの過程は日本における70年代の女性解放運動の高まりの過程と一致しているようにも見えるのである。

女性自身による女性解放への動きの中で、30～40代、乳幼児期はすぎたがまだ独立はできないという子を抱えた女性たちを中心にこの語は使われはじめた。それは従来の「育児」の概念をも含み、さらに自らの人生において子を育てることを位置づけるという新しい意味をも含んで使われている。その新しい意味故にこの語に対する好悪は大きくわかれる。

この語は「子を育てる」ということに関しては「育児」等を上回って広い概念を内包している語でもあり、「育児」よりは抽象的な語でもある。その新しさもあってであろう、新聞等をも含め広く使われる語ともなっている。その結果、従来の「女がするもの」という育児のイメージを覆すのではなく、単に「育児」の言い換え語的な働きにとどまってしまっている面もある。というのが、この小さな調査によって得た私自身の「子育て」(という語)観といえるだろうか。